# 高空のアリス―白と黒に生きる者

ひととせ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
高空のアリス―白と黒に生きる者

【Ｎコード】
Ｎ２８１７Ｅ

【作者名】
ひととせ

【あらすじ】
火星にあるプルーム学園より留学生として招待された長崎銀次郎は、とある事情によって誘拐されしまった。そして出会った少女は語る。「世界を分解してその欠片を再構築する。わたしにはその権限がある」軍隊すら独断で動かすことが出来る少女は自らを『独裁者』と呼ぶ。ひょんなことで、少女の秘密を知ってしまった少年は口封じにと彼女の秘書としてこき使われてしまう羽目に。毎日が平凡だった少年は、忙しくも充実した日々を送っていた。そんなある日。ある一通の手紙が火星を揺るがす事件へと発展してゆく。

# 序章

序章

世界が嫌いなら、
自分の世界を作ればいいじゃない。
誰かが作った世界で生かされるなんてまっぴらだ。
そうだ。
そのために独裁者になろう。
そして誰も苦しまない世界を作ろう

セフィーネの朝は早い。何処からともなく聞こえてくる鶏の鳴き声でベットから這い出してくる。
キングサイズのベットであるのに、ベットとして機能している箇所はシングルサイズより小さめであるが、セフィーネにはそれでもちょうどいいのだ。ちなみに、ベットを占拠している物は大量の本だ。
慎重にベットから足を下ろそうとしている床には、いくつもの本の塔がそびえ立っていた。下手に当たれば隣接する塔を倒しかねないので、ここは特に気を使う。
ベットの周りにある本の塔は、そこだけではなく寝室中にあり本の迷路が出来上がっていた。幅は人が横になってギリギリ通れるくらいしかない。しかし、セフィーネは特に気にするでもなく器用に迷路を潜り抜けていき、あっという間にテラスへと通じる大きな窓へと辿り着く。
レースのカーテンの隙間から暖かい朝日が差し込み白く輝く窓辺からは、赤レンガを敷き詰めたテラスと、広大な庭、そしてそこか

ら海まで見渡せる絶景が待っていた。
昨日は雨。あれだけ降れば翌日の天気は――
「晴れ！」
晴れ渡った青空への喜びから、つい手に力を込めて窓を開いたせいで、本の塔による大迷路が大きな音を立てて連鎖反応で崩れ去った。
セフィーネは一度後ろを振り返っただけで、あまり気にすることもなく裸足でテラスへ歩き出す。レンガが少し冷たくて少し身を縮めた。
「うっう――ん」
空気には春の香りが伴っていた。空は青空が広がっていて快晴である。
朝戸風がテラスを撫で、レースがあしらわれたネグリジュの裾と、桃色がかったセフィーネの長い髪がフワリと宙を舞う。少し冷たい風だが、まだ残っていた眠気を吹き飛ばすちょうどいい風だった。
「ありがとう」
それに答えるようにまた、セフィーネの髪が舞った。
「さてと」
セフィーネは、右手を広げ、親指と中指をくっ付け勢いをつけて親指を擦る。
――パチン！
と、小気味のいい指パッチンが鳴るはずが不発に終わる。もしこれが成功していたら、銀河ネットワークラジオが起動するはずだった。
「む」
高台に位置する広大な庭を有しているセフィーネの西洋風の屋敷には彼女一人しかいない。それでも、カッコつけようとして失敗したらそれは、恥ずかしい。
また、負けず嫌いの性格がある者ならば次こそ成功させようと挑戦するだろう。セフィーネも、歩いて三分もかからない寝室へ行き

端末に触れればいいものを、人一倍負けん気が勝るセフィーネにはその手段は論外であった。
――数分後。
テラスには、古めかしい音楽が流れていた。
結局セフィーネはあきらめて、論外の手段を選んだ。
不発続きで、指が擦れて真っ赤になっていたからだ。
（もう、誰よ。こんな紛らわしい設定を入れたのは・・・・・・）
セフィーネは不機嫌そうにアンティーク風の木製の椅子に腰掛ける。
その設定を入れた本人は誰にぶつけるわけでもない不満をブツブツ零しつつも、屋敷中に流れるノイズ交じりの古めかしい音楽に耳を傾けていた。
――ガサガサ。
陽気にうとうとしていたセフィーネは、ハッと目を覚まし音のする方角を凝視する。この屋敷は周囲を山で囲まれているため隣人はいない。屋敷もセフィーネの一人住まいだから使用人もいない。そうすると今座っている椅子から数メートル先にある垣根の奥で音を立てる犯人は動物であろうと推測できる。（なんだ。ネコかイヌあたりか）
そう思いまた眠気がやってきて、二度寝の機会を余すことなく掴もうと――
「いだっ」
は、出来なかった。
セフィーネの前に、垣根を越えて男が倒れこんできたのだ。
「あいたた」
突然やってきた闖入者にポカンと口を開けて驚いていたセフィーネは、ヨロヨロと立ち上がった男と鉢合わせしてしまった。
数秒間時間が止まった。
「あ。す、すみませ―」
「きゃあああああああああああああああああああああああああああ

あああ――――」
セフィーネの絶叫が屋敷中に響き渡った。
男はまだ若い少年で短めの黒髪に、どこか見覚えのある服を着ていた。
少年は、生地の薄いネグリジュを身にまとった少女から突然悲鳴を発せられたことで動揺しアタフタしていた。そして、こんな大きなお屋敷なら今の悲鳴を聞いて人が集まってくると思い一目散に、少年は倒れこんできた垣根へと飛び込んだ。
そこは急斜面となっていて上り下りするのは容易ではない。
案の定少年は途中で足を滑らせた。
「うわあああああああああ――」
悲鳴が斜面の下から漏れその後、バリ、バリ、バキという何かが折れる音が続く、そして最後にグシャという嫌な音を最後に何も発せられなくなった。
ただ森で羽を休めていた鳥が驚いて飛び上がっただけ。辺りには、ラジオからながれる曲だけのいつもの庭に戻った。

下手に触れば火傷しそうな足跡を伴いセフィーネは通路を闊歩していた。すれ違う人々はセフィーネに気が付くと挨拶をしようと口を途中まで開きかけて、そしてそのまま黙り込んだ。今言葉をかけるのは大変よろしくないと判断したからだ。だが中には、条件反射で「あ。おはようございます」と声を掛けてまるで親の仇でも見るかのように睨みつけられ、半泣き状態で固まってしまう不幸な人もいた。
セフィーネは、丁寧な装飾が施されたドアノブを握るとアンティーク風のドアを半ば蹴り開けるように中へ入った。
「おはようございます」
中に入るとまず補佐官が挨拶を交わし、いつも以上に乱暴な開け

方でドアを閉め、そして立派な大きな机に備え付けられた、これまた立派な皮の椅子へ体を投げ入れる。
「な、なにかありましたか？」
この状態は、何やらとてつもない事態が起こったのではと、黒縁メガネをかけた金髪の男の心の中は冷ややかではなかった。
何せこの少女は普通の少女ではない。見た目は十一～十二歳くらいの子供であるがこの火星には居なくてはならない重要人物なのだ。
補佐官が下手に触って蛇を出さないように、いつもどおりに少し温めの紅茶をそっと出すと、セフィーネはそれを乱暴な手つきで一気飲み。
その様を見て、これはただ事ではないと補佐官は背筋にヒヤリ、と冷たいものを感じた。
ソーサーにティーカップを置くと、への字に結ばれた重苦しい小さな口が開く。
「ある人物を探して欲しいの」
そう大声で言い放った。
室内に居ようが、人と会おうが、いつも帽子をかぶっているためその表情は伺いしれないが、肩がわなわなと小刻みに震えている様子から、酷くまずい状態だと理解できた。

川のせせらぎがすぐ側で聞こえその音で目を覚ますと、小川の側に倒れていた。
少年は体を起こすと体の怪我の程度を見える範囲で確かめる。
頭に少し痛みがあるのと両手の甲に擦り傷があるがいたって無傷であった。あの急斜面から転がり落ちたハズなのに。
「しかし、びっくりしななぁ。あんなところに人が住んでいたなんて」
服に付いた泥を叩くと、少年は斜面の上を見上げた。

（綺麗な女の子だったなぁ）

大きなお屋敷で偶然出会った桃色髪に青い瞳が美しい少女。その姿を見たのは一瞬であったが一瞬であったため、より脳裏に焼きついていた。

しばらくぼーっとしていた少年はハッと我に返り、ズボンのポケットを漁った。そこから出てきたのは、少年の顔写真がついたカードだった。

太陽に透かすと、桜の花びらの透かしがカードの四隅にあしらわれてあり、中央には同じく桜の花びらが付いた紋章がある。見た目は普通のカードだが、なかなか凝った作りでそこには『プルーム学園学生証　長崎・銀次郎　Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｇｉｎｚｉｒｏｕ』と書かれある。

ポケットに学生証があったことに安堵して、銀次郎は時計に目をやる。最後に時計を見たときは朝の六時で今は九時になろうとしていた。

（まずい。かなりまずい）

まさかこんなに時間が掛かるなんて。

指定された時間は今日の夕方、日が暮れるまで。

それまでに手続きが進まないと失効してしまう。

せっかく掴んだチャンスを逃すわけにはいかない。なんせ地球でも名門と謳われる『プルーム学園』から留学生として招待状が届いたのだから。近くの公立高校にギリギリは入れるかどうかという成績の自分に留学生の資格があるのかと三日三晩考えた。亜空間ネットワークでもこの学園の公式ページは無く、他の人間に聞くと「プルーム学園は変人の集まりで、その者の隠された素質を見出し、それをより高みへと導くことをモットーにしている。火星の住民なら苦も無く入れるが留学生となれば別で、学園が選んだ人物しか入学させない。月の大富豪が天才ともてはやされる一人息子を留学生として迎え入れるように要請したが断られ、目もくらむような金額の寄付をすると伝えても頑として受け入れなかった。しかもその話に

似た噂が複数あるというのだから、よほど変人の学園であろう」という意見が返ってきた。
当然家族は大喜びして、親戚や近所の人達まで集まって壮行会を開いてくれた。
火星に到着して学園の寮に来るまではよかった。
悲劇は、翌朝起こった。
学園から送られてきた資料には、入学手続きを期間まで行なわないと資格を失効すると書いてあり、銀次郎は真っ先に手続きをしようと必要書類を揃えて学園の事務室に出向こうとした。が、それは先延ばしにするしかなかった。
寮の部屋で持参する書類を確認していたとき、一匹の鳥が舞い込んできて書類の中でも一番欠かせないモノ、この学生証を咥えて飛んでいってしまったのだ。今思うと、何故あの時窓を閉めておかなかったのかと、後悔が後悔を呼んでしまうがこうして取り返すことができたのだから、結果よければ全てよしだ。
しかし、普通鳥が学生証を咥えていくかとはなはだしく疑問に思うが、さすがにこれだけの装飾を施してあるんだから鳥が巣の材料にしようと思うのは無理ないか。
銀次郎は学生証を今度は大切に胸ポケットにしまう。
下ろし立ての制服は泥を払ってもしつこい汚れは落ちず、かなりみすぼらしい。丸一日山の中を、学生証を咥えた鳥を探していたのだから当たり前だった。斜面から転げ落ちもしたし。
期限までは半日ある。この姿で事務室を訪ねるのはいささか失礼にあたる。
（一度着替えてから出向くか）
その時。
銀次郎は、自分が窮地に立たされているとは知る由も無かった。

# 第一章―秘密

第一章

アリス州警察本部。
会議室らしき部屋におかれた長い机の一番奥にセフィーネは居た。
やはりここでも帽子を取ることは無いが、朝の様子とはまた少し変わりいつもの落ち着きを取り戻していて、椅子に上品に座る様は深窓のお嬢様といったところだ。
時折、何か不安そうに桃色がかったブロンドの髪をいじり、側に座っている金髪の補佐官にしつこく時間を聞いていた。
「お待たせしました。姫様、トム補佐官」
部屋に白いヒゲが特徴の恰幅のよさそうな中年男性が入ってきた。
「すみませんワイズ本部長。突然このようなお願いして」
「わはははは。麗しき姫様のたっての願いとあらば聞かぬわけにいきませぬ」
あれからセフィーネは、トムを引き連れアリス州警察本部へと来ていた。目的は朝の闖入者について。当然当の本人である銀次郎のことは知るはずも無い。
「で、今日はどういった用件ですかな」
「はい。実はまだ私もよくお聞きしていないので」
チラリとワイズとトムは、大人しく椅子に座るセフィーネを見た。
「姫様一体どうされましたか」
つぶっていた目が開き、蒼穹がそのまま閉じ込められたような青い瞳が露になる。
「実は今朝、いつものようにテラスで銀河ネットワークのラジオを聞きながら、椅子に座っているとき・・・・・」

重苦しい口調に会議室の空気が一変する。
「そ、その。き、急に男が現れて・・・・・・。わ、わたしを押し倒したのです」
「な、なんと！」
トムとワイズの声が重なる。
「その者は、わ、わたしを襲うおうと服を剥ぎ取ろうとしたのです。ですが悲鳴を上げたらその者は庭の垣根を越えて斜面を転がって逃げていきました」
セフィーネの目には涙がたまっていた。それを男に襲われそうになった恥ずかしさと悔しさと怒りからだと判断したワイズは、顔を真っ赤にして憤怒した。
「ゆ、許せません！我らが姫様にそのような狼藉を働くものがいるとは。ええ、許せません！」
湯気が出そうなほど真っ赤になったワイズと対象に、トムは顔を真っ青にして、ただただ困惑していた。
「男に襲われたなんてとても恥ずかしくて」
「ご安心ください。その者はすぐ捕らえて宇宙に放り出してやります」
「ワイズ本部長。たとえ犯罪者であろうとも即裁いてはなりません。わたしは、何故その者が罪を働いたのか、人伝や書類からではなく直接話を聞きたいと思っています。そして更生する機会を与えなくてはいけません。罪を憎んで人を憎まずです」
「おぉ。さすが姫様。なんとお優しい」
「ですので、逮捕されましたらわたしに連絡してください」
そう言うとセフィーネは、多少人の顔とは言い難いが、とりあえず人の顔と大甘採点の似顔絵をワイズに手渡した。
ワイズはそれを見て少し苦い顔をしたように見えた。
無理も無い。
「犯人の男は、短めの黒髪でまだ若い少年です。歳はわたしと同じ歳くらいです。他の州に逃亡しているとは考えられませんが、アリ

ス州全体に手配をお願いします」
「少年ですか」
「そうです。なので、彼がより大きな過ちを犯す前に捕まえてくださいませんか」
「はっ！」
ワイズはテーブルの上に置かれた電話で部下に指示を与える。
指示が下りたとこを確認すると、セフィーネは立ち上がった。
「ワイズ本部長。わたしは仕事が追ってもうすぐ側まで追いついておりますので、州庁に戻らせていただいきます」
「はっ！このワイズ。必ずや犯人を捕まえてみせます！」
「おねがいしますね」
セフィーネは、また困惑の表情を浮かべるトムを引き連れ会議室を後にする。
絶対に捕まえなくてはならない。
秘密を知ったものは消えてもらわなければならない。
もし誰かに秘密を話そうものなら、わたしのアリスとしてのキャリアが終わる。
だからなんとしてもあの少年のを確保して真意を確かめねば。

州庁へ戻る途中の車内。
火星で走る車は全て電気自動車なのでガタガガと、石畳の上をタイヤが走る音しか車内に伝わらない。
「お体は大丈夫なのですか」
「心配ないわ。半分は嘘だから」
「そうですか――え！？」
「言ったでしょ半分は嘘だと。でも、残り半分は本当。襲われはしていないけど、男が屋敷に侵入してきたのは事実よ」
「な、ならばなぜ本当の事を・・・・・・。とても心配したのですよ」

急に飛び出したセフィーネの言葉に、トムは文句を返す。普段は温和な彼が文句を言うとは、よほどセフィーネのことを心配したのだろう。

彼女はその言葉にニコリと微笑む。

「嘘はどうひっくり返しても嘘であるが、嘘にはとてつもない破壊力を持っている。時として大げさに事を伝えることで人にそれを真実だと信じ込ませなくとも『人の意思』を誘導することができる。その際もっともらしいことを並べるのではなく、もっともらしいことの中に嘘だと思うような言葉を入れるだけで人は嘘か真かと思い悩んでしまう。そうしているうちにそれを真実だと信じる者と、嘘だと思う者が出てくる。人はどちらか一方に傾き、双方で議論が巻き起これば嘘が嘘を呼びまた、真実が嘘を呼ぶ。そのため人は嘘のパラドックスに陥りやすくまた脆い。嘘の免疫に乏しければ効果は絶大なの。そしてたとえ効果は薄くとも結果的に見れば、多くの『人の意思』を誘導させることができる。」

「はぁ」

さっぱり分らないというふうにトムは首を傾げる。

「今回は、その少年を何としてもわたしの前に引っ張り出したかったから、戦力を集中させるために大げさに言ったの。嘘は昔の独裁者の常套手段なのよ。あなたもちょこっと嘘のエッセンスを加えれば奥さんも帰ってくるわ」

「な。なぜ、それを」

「うふ。秘密」

鳩が豆鉄砲を喰らったように呆然とするトムを他所にセフィーネはイタズラに成功した子供のような忍び笑いをしたが内心は、冷静ではいられなかった。時間が過ぎれば過ぎるだけ毒が回る。解毒剤が毒に勝つかは時間との戦いになる。戦力を集中させたのだから解毒剤が勝つと安心できない自分がいた。

初めて自分の秘密を他人に見られたのだ。心穏やかでいられるほど度胸は無い。

セフィーネを乗せた白い自動車は大通りに入り、街を縦横無尽に走るアリス州都の名物でもある路面電車とすれ違う。
セフィーネはそれが視界から消えるまで目で追っていった。清涼飲料水メーカーの製品がペイントされていて印象的だった。

プルーム学園は州都アリスのほぼ中心に位置している。
アリス州が教育と観光に力を入れている州であることから、幼稚園から大学まで一貫した教育が受けられ、地球や月で活躍している有名人を多く輩出している。
その独特の校風は、内外から『変人学園』といわれるほど一風変わっているらしい。
プルーム学園前停留所で降りると、目の前に石造りの建築物が姿を現す。
ゴシック様式で立てられた学園の校舎は、数回見たのに今だ背筋にピリッとした緊張感を感じさせずにはいられない荘厳さを秘めている。
「よし。いくぞ」
期限は今日の夕方日が暮れるまで。
空を見るとそれはまだ先で、十分間に合う。
学校にカジュアルな服装で行くのはどうかと思ったが、あの泥だらけの制服で事務室のドアを叩く自分を想像するとやむを得ない。
もし注意を受けても自分のせい――というよりも鳥のせいなのだから、仕方ない。
肩掛けのショルダーバックをさも大事そうに抱えてあるく銀次郎の姿を見た人の少なからずは不審者と思ってしまうかもしれない、そんな歩き方で学園の門、これまた立派な装飾が施された大きな鉄格子の門をくぐる。
しかし、本当にバカ広い学園だ。
バックから学園のパンフレットを取り出し、そこから見取り図を

取り出した。
各校舎は勿論大学の研究施設から、空港、水族館、動物園、ショッピングセンター、病院と充実している。敷地もかなりのもので、端から端まで歩くとしたら丸一日潰れそうなほどだ。
ちなみに、男子寮は何故か学園から路面電車の停留所五つほど離れたところにある。今は授業があっていないので学園前までしか電車は来ないが、授業が始まると学園内まで路線が伸びる。寝坊して乗り損なったらアウトだ。
「えーっと事務室はここから真っ直ぐか」
地図の下に二センチで五百メートルという縮尺の表記があるが見なかったことにしよう。もしそれを信じるなら現在位置から事務室までは六センチはあるからだ。
まさか。
それは歩いてから数十分経ってやっと信じることにした。
終わりが見えないからだ。
その時。
突然黒塗りの車が突然側を猛スピードで銀次郎を抜いていった。
「うわ」
驚いたせいで足がもつれて前へ倒れこんだ。
「あぶないなあ」
するとその車が反転して此方へ向かってきた。
「え」
すぐ目の前で止まった車から出来てきたのは真っ黒のスーツと真っ黒いサングラスを身にまとった海千山千の屈強な男達が二人出てきた。
銀次郎は自分何かをしたのだろうかと記憶を探るが、思い当たる節はない。
男達はいつの間にか自分の周りを取り込んでいて、
「あ。あの。な、何かあり・・・・・・ました、か」
サングラス越しで目は見えないが、無言で銀次郎を取り囲む男達

には鋭い殺気のような感じを持っていた。
「お前に用がある」
「え？」
そう男は言うと銀次郎の手を強引に引っ張り、そのまま後部座席に押し込めた。
銀次郎は両サイドを男二人に囲まれて、怯えきっていた。
鳥に学生証を取られてそれを取り返すために一日半山を彷徨って、やっと見つけたと思ったら、急斜面から転がり落ちて制服はボロボロになって今度は誘拐とは。
不幸すぎる。
火星に着いてからろくな事がない。
その前はまあ理解できよう。だがしかし、誘拐される所以がわからない。
僕の顔をよく見ろ。金持ちそうな顔をしていないだろ。
頭の中が混乱して、うろたえているうちに車が急発進し、その衝撃で一番不幸な事を思い出した。
「あっ。じ、事務室に！！」
期限は今日の夕方。
日が暮れるまで。
それまでに手続きが行なわれないと資格は失効する。

そこは客室らしき部屋だった。
途中から男達に袋をかぶせられ、連れてこられたのがここだ。
道中斜面を登る時間を多かったから、ここは高台にあるのだろう。
男達は銀次郎を部屋へ入れると袋を取ってどこか行ってしまった。
室内は質素な作りで、床は絨毯。暖炉と三人掛けのソファーが一つと、机を挟んで二人掛けのソファーが一つ。それ以外は何もない。あるとすれば埃だ。全く掃除の手が入っていない絨毯には歩くたびに足跡が付く。長い間だれも使っていないのだろうか。

シンと静まり返る建物に、銀次郎はもしかしてと思った。
物音を立てずにそっとドアに近づきドアノブを捻ると以外にも呆気なく開いた。
廊下から顔だけを出して周囲を覗っても人の気配が無い。いや、無いとは断言するのは建物の中を調べてからにしよう。鍵も掛けていないということは、連中は外で見張っているかもしれない。
廊下に出て人の気配を覗いつつ進む。
部屋に鍵をかけておいたほうだ効率的な筈なのに、なぜ連中は鍵を掛けなかったのか。　鍵が掛かっていなかったことは幸運だったが、それが不思議でたまらなかった。
もし逃げれるならば、何としてでも学園の事務室に行かなければならない。せっかく皆が盛大に送り出してきたのに、これでは申し訳が立たない。
ふと銀次郎の頭に、遠くへ行くことになった義兄を悲しんで大粒の涙を零した義妹の姿が浮かんだ。
（春香に約束したんだ。絶対にみんなの生活を楽に出来るように頑張るからって）
しばらく廊下を進むと、玄関に出た。
しめた。と思った。これで出られると。
だが次の瞬間、玄関のドアのガラスに連中の一味の後姿が映っていた。
（あ・・・・・・）
華麗に脱出。とは露と消えた。
誘拐犯が早々容易く銀次郎を逃がすくらいなら、誘拐なんてしないだろうと少し冷静になれば分かることだった。
ここは大きな鳥かごだ。
そしてはっと気が付いた。廊下の先にアンティーク風の電話があることに。それで警察を呼べば助かる。
気配を出来るだけ消して、身をギリギリまで低くし玄関を通り過ぎる。この難所さえ通ればあとは電話を掛けるだけだ。

電話に辿りつき受話器を上げ、一一〇番に電話したまではよかった。
『お掛けになった電話番号は現在使われておりません』
一瞬で体が凍りついた。
火星の警察の電話番号が知らなかったのだ。
受話器を持ったまま立ち尽くしていると、また春香の顔が浮かんだ。
（まてよ。確か春香が・・・・・・）
シャトルで地球を発つときに「困っときに使ってね」と言って、紐が長くて首からかけることが出来るお守りをくれたことを思い出した。それは当然、首にかかっている。
お守りの縁を空けると、小さな紙が出てきた。そこには、火星から自宅へ電話するときの方法が書いてあり、隅に「寂しくなったら電話してね。お兄ちゃん」と可愛らしい文字が添えてあった。警察を呼ぶ番号では無いが、救いの手だ。早速番号をダイヤルするが火星と地球とのリアルタイム音声通信に使用する亜空間通信は繋がるまでが時間がかかるというのが欠点だ。こういう切羽詰った時にはもどかしくてたまらない。
『只今お呼び出し中です』
実際の時間は数分だろうが、銀次郎には一時間くらいに感じられた。
まだかまだかと待っていた矢先に、
「はい。もしもし。・・・・・・もしも――し？」
懐かしい声が受話器から漏れた。
銀次郎は受話器を取ろうと手を伸ばした。ところが、玄関のドアが開く音と共に声が聞こえてきた。
このまま受話器を取り、義妹に助けを求めているところを見つかるか、それともどこかに身を隠すか。
思い悩み、銀次郎は身を隠すことにした。しかし、このまま堂々と玄関を通って元の部屋には戻ることが出来ない。逃げ道は目の前

にある部屋へ隠れること。もしかしたらそこに電話があるかもしれない。迷っている暇なんかあるはずがなく、部屋に入ってドアを閉めたのと、連中が玄関から姿を見せたのはほぼ同時だった。

その部屋は他の部屋と違って生活観があった。

いや十分すぎる。

銀次郎が飛び込んだ部屋は、寝室で部屋の端に大きな天蓋つきのベットがあり、その奥にはビロードの立派なカーテンでがついた真っ白な窓から西日が差し込んでいた。

十分すぎる生活観とはまず、寝室に入ってすぐに見つけたフリフリがついた女性物の下着や、これまた女性物の洋服が散らばっていたことと、ちなみに下着の間にジュースの紙パックが覗いていた。あと、部屋の床やベットの周りを膨大な数の本が散乱していたことからだ。

こんなゴミだらけで人が生活できるのかと呆れてしまう。まったくこんな散らかしっぱなしだなんてここの住人の顔が見てみたいものだと思う銀次郎だが、それはそれでよろしくない。普通ならこんな部屋を見たら片付けずにはいられないのだが、それは胸中にしまっておいて、兎も角目の前にある窓から外へ出れるかもしれない。

下着とそれに隠れるジュースのパックに、人の顔以上もある頑丈そうな本に注意して窓際へ行くとビロードのカーテンをサッと引いた。

そこから見えたのは、今まさに彼方の水平線に沈む真っ赤な夕日と、今朝銀次郎が迷い込んだお屋敷の庭だった。

真っ赤な夕日が意味するものは、学園の入学手続きが終わったということ。このまま無事逃げおおせても間に合いはしないだろう。

そう思うと、どっと体の力が抜けペタリと床に座り込んだ。

行方を眩ました両親に代わり、自分をここまで育ててくれた血が繋がっていなくても家族として迎え入れてくれた人たちに恩返しが

したい。だから、学園から留学生として招待状が来たときは心から嬉しかった。だが、それはもう叶わない。
目頭に熱いものを感じ、すぐ手で拭った。泣き叫んでも状況がよくならないことはわかっている。
なら泣くだけ損だ。
損することに時間を使うなら、このまま外へ逃げ出すことに時間を割くべきだ。
ただそれは体に力が入ればの話だ。一度抜けた力はしばらく戻ってくる気がしない。
無理に立ち上がろうとしたら前のめりに突っ伏し、足がガクガク震えていることに気が付いた。表面上は落ち着きを取り戻しているが、中は不安で埋め尽くされている。それに気が付かないということは相当動揺しているのだろう。それはまるで、冷静に振舞う自分を酷く動揺したもう一人の自分が足を引っ張っているかのようだった。
あわてず、
あせらず、
あきらめず。
いつか。誰かがそう教えてくれた言葉が心を巡る。
そうだまだ死んだわけじゃない。絶望は死ぬときにとっておかなければならないじゃないか。
そう思うと足の震えが次第に収まってきた。
部屋は太陽が沈んだことで薄暗くなり、もう少しで辺りは闇に沈む。もう山の中で彷徨うのはごめんだ。
見たところ窓には鍵らしい物は付いていない。
・・・・・・そういえば、ここは今朝迷い込んだでっかい庭を持つ屋敷。ここに連れてこられたということはあの一味はここの関係者ということになる。確かに不法侵入まがいのことをして、まだ十一から一二歳くらいの少女に悲鳴を上げられたが、誘拐されるいわれは無い。しかし、理由はどうあれここから逃げ出すだけだ。

足の震え具合を確かめつつゆっくり立ち上がった。
すると室内に明りが灯り、
「まちなさい！！」
という声に静止させられた。
静止よりは、大きな釘で動きを封じられたに近い。
一気に鼓動は跳ね上がり、そのまま心臓が口から飛び上がってくるのではと思うほどの酷い吐き気が込み上げてきた。
声は女性のもので真後ろ、銀次郎が入ってきたドア付近から聞こえた。
「あ、わ、ああ」
全く言葉にならない音が口から漏れる。
「ようやくみつけた！覚悟しなさい！！」
電池が切れ掛かった人形のようにゆっくりと体を一八〇度向きを変えると、そこには今朝この庭で出会った少女がいた。ただあのとき見た美少女ではなく、こめかみに青筋をいくつも浮かべ、桃色かかったブロンドの髪は逆立ち、肩を激しい怒りに震わす少女が仁王立ちしていた。
なぜこれほどまで少女が怒っているのか全く理解できないが、手を触れれば触れた先から一気に全身まで炭になってしまいそうなほど煮えたぎった怒りの炎がそこにいた。
「よくも」
一歩部屋へ。銀次郎は後ずさるがすぐ窓が来て追い詰められる。
「よくも。よくも」
さらに一歩前進。純白のパンツを踏みしめる。
「よくも。よくも。よくも」
あ。とそのまま言葉が口から出たか分らないが、そう思った。少女が足を踏み入れたそこは下着とジュースの紙パックが折り重なっている危険地帯だったからだ。
「あぶ――」
全てを言い終わる前に、

「ふぎゅっ」
というなんとも可愛らしい悲鳴と共に現実の物となった。
少女が次の一歩を出そうとしたとき足が滑り、人も楽に撲殺できそうな頑丈な革張りの本へ前のめりに突っ伏したのだ。その時ゴツリという鈍い音がして、部屋はシンと静まり返った。
しばらく銀次郎はポカンと口を開けたまま呆けていたが、しばらく経ってもあの炎は復活しなかった。そうなると流石に黙って放って置けるほど、銀次郎は腐ってない。
側によって体をさすると、呻き声が小さな口から漏れた。
安堵のため息が口から零れる。本で頭を強打して気絶したのだろう。
そのままでも命に関わることはないと思うが、お人よしと義妹の春香から指摘される銀次郎が放って置けるわけも無い。
ベットの上に転がった本を退け、少女を抱え上げると、想像以上に軽くて驚いた。女の子の体ってこんなにも軽いのかと感嘆してしまう。
こう言うともろもろで問題があるが、少女はとても可愛い寝顔で、人形のようだった。抱え上げる際に帽子が落ちらが、気にせず少女をベットに寝かす。桃色がかったブロンドの髪をかき上げて、本でぶつけたおでこを確認すると赤く腫れてはいるが血は出ていなかった。
しばらくすると意識は戻ると判断して銀次郎は、この寝室に備え付けられている洗面所を見つけて一番真新しいタオルを探し出すと、水に浸してそれを少女のおでこの上に乗せようとして、少女の頭についている妙なものに目がとまった。それは異質すぎて逆に今まで脳が無いものとして処理していたのだろうか。
少女の異質な耳を。
ちょっと変わった耳なら別として、耳は頭の天辺には付いていない。
それは今はへたれているが、動物のそれでである。猫の耳がそれ

に一番近いかもしれない。髪の色とは違うアッシュブロンドの毛並みで、少女の呻き声に合わせてピクリピクリと動く耳は、作り物ではないと十分すぎるほど銀次郎に納得させた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

頭の理解度の許容範囲を超えた出来事に思考が止まりかけようとするも、両方の頬を思いっきり抓ることでなんとか回避することに成功する。

そして自分でも納得がいくような理由付けに移り、頭を巡らせ理由も探すも納得がいくものが見つからず、やっと導き出したのは「これは最先端のアクセサリーか、端末のインターフェースだ」だった。

うん。そうに違いない。

だが見なかったことにしておこうと考える辺り、本心はその理由を疑っている。

ただ、目をつぶってしまえば普通の少女には変わりない。

(とりあえず、この子はいいとして・・・・・)

銀次郎は部屋を見渡した。

当初は薄暗いせいもあり、全体は把握できなかったが明りがついた状態だと、よくもまあこれだけ散らかしたものだと、ある意味感心してしまう。

家族一ガサツな義妹でもここまで部屋を散らかしたりはしない。散らかすのも才能であると誰かが言っていたが、うず高い本の山脈と、下着と洋服の山脈、何らかの難しい単語が並んだ紙束の草原、ジュースの紙パックのビル群を目の当たりにすれば、今ならそれもうなずける。

チラリとベットの上で可愛い寝息を立てる少女を見て、銀次郎はやれやれというふうに深いため息をついた。

「まったく今日はついていない」

ため息がまた零れた。

少女が目を覚ましたのは一時間位経った後だ。
焦点が定まらないトローンとした目でキョロリ、キョロリと辺りを見回すと、食欲を誘う香ばしい香りが鼻を撫でていく。
少女はここが病院だと思った。最後の記憶が本で頭をぶつけた所で終わっているのと、　自分の部屋はこんなにも綺麗になっていないし、他の部屋も似たようなものだ。それに誰かが介抱してくれているし、ならば病院だろう。
しばし、ぼーっと目線で宙を仰いでいたところに、いつもとは違う違和感を覚え、頭に　手を置く。無い。帽子が無い。今日かぶっていた白のハンティングキャップを探すとベット脇のテーブルに、まだもうもうと湯気が出るスープと一緒に置いてあった。
まず先に手が出たのが帽子。
そしてそのまま凍りついた。
ベット脇に備え付けられた猫足の椅子にあの少年が、幾分歳が幼く見える笑顔を浮かべて座っていたのだ。
「な、な、な」
「やあ。やっと目を覚ましたね。急に転んで気絶するから驚いちゃったよ。あ。あと台所を勝手に使わせてもらったから」
火星の大極点の氷のように固まった少女の前に、暖かなスープが現れる。おどおどと両手でそれを受け取った彼女は、先ほどまで自分がカプセルにつめて宇宙に放り出してやろうとまで考えていた相手が、一度ならず二度までも自分の秘密を見てしまっていることで次第に沸点を超えゆく怒りが再度復活してくる。
この少年も、スープをもつ少女の肩がピクピク小刻みに揺れ始めたのをみて、すこし戸惑った表情を浮かべていた。君を看病したのは僕だぞと、言いたげな表情と共に。
しかし、怒りを妨げる存在が手の中にある。大分冷めて温めにな

ったポタージュだ。
どうせ少年は朝のことを見てなかったとしても、今この場で確実に見てしまっているのだから、黒に近い灰色ではなく真っ黒確定だ。ならば少年を絞り上げる手間が省けるというものだ。宇宙に放り出すのは少々時間が掛かる。
黙ってカップに口を付け、ポタージュを啜っている間も少年の表情には変化が無い。時折、目線が自分の猫耳にいってはいるが。
飲み終わると、本題に入らなければならない。
（・・・・・・・・・・・・・ん？）
いやまて。
さっき自分はここを病院か何かだと思った。なら、この少年がいるはずもない。護衛官が気絶している自分を見つけて運ぶはずだ。ではここはどこだ。
カップに口を付けたままよくよく見渡せば、見慣れた部屋に常にある本の山はどこにもない。その代わり、きちんと分類別に本棚へ直してある。脱ぎ捨てた着替えの山もない。まるで合点がいかないといった表情を浮かべていたのだろう。少年がその理由を話してくれた。
「あ。部屋は勝手に片付けさせてもらったから」
呆気に取られてこう聞き返した。
「お前が片付けた？」
「そうだよ。君が気絶してるうちにね」
今起きている頭痛とは別の頭痛で、ついめまいを覚えた。
誘拐されてきた人間が、誘拐を命じた張本人を介抱して、尚且つ散らかった部屋を掃除までするか。いやありえない。普通の人間なら、恐怖に顔を引きつらせて泣き喚いて命乞いをするものだ。それが、この少年の反応はまったく違う。
底が見えないお人よしか、
バカか、
阿呆か、

それとも全てか。
そして、怒りとは質が違う怒りを持っていることに気が付いた。
それはチリチリと、音を立てる苛立たしさに似た怒りだ。
だが、そう思っているのに、なぜか少年に好奇心をくすぐられずにはいられない。それはきっと、他の人間ともろもろの反応が違うからなんだろう。
とりあえず、宇宙に放り出すのは遅らせよう。
「わたしの名前はセフィーネ。セフィーネ・リリー・ココフ・アウラーだ」

銀次郎は落ち着きの在る上品な声の持ち主にすこし驚きを覚えた。最初の怒りに満ちた声とは到底同じに思えなかったからだ。
しばし、ぽかんと口を開けていると、鋭い目線が飛んできた。それが何を意味しているのか理解するまでに、次第にセフィーネの表情に不満の色が浮かんできて、やっと意味を理解した。
「えっと。ぼ、僕は銀次郎。長崎銀次郎です」
セフィーネの猫耳がピクリと動いた。本当によく出来ているアクセサリーだ。
「日本人？」
「は、はい」
「今朝庭で――」
「ごめんなさい！」
セフィーネが全てを言い終える前に銀次郎は深々と頭を下げた。
思い当たる節が無くとも、それは自分が気付いていないだけで、なにかとてつもないことをやらかしてしまったと思ったからだ。だから、謝って許してもらう。
「それはもうよい。もうお前、銀次郎といったか。すでに二度もわたしの秘密を見てしまっているからな」
「は、はい。す、すみません。・・・・・・あ、あのところで『秘

密』とは？」
また、耳がピクリ、ピクリと二度動いた。
「む。それはお前がさっきからずーっと見ていたこの耳だ」
その言葉にどきりとする。
「その耳が？」
「そうだ。今朝お前がこれを見てしまったから、それを誰かに話す前にここへ連れてきたのだ。って、おい！」
堪えきれず、吹き出してしまった。
その耳が秘密だ。とは、おかしい話だ。
「な、なにがおかしい！」
もし牙が生えていれば、むき出しにして唸っていそうな表情で不満をぶちまける。
「だ、だって、そ、それはアクセサリーか、何かのインターフェースなんだよね。そ、それが秘密だって言われても」
「な、な、こ、このわたしの耳が偽物というのか」
信じられないといった顔で、実に悔しそうな。子供が一番気に入っている物をバッサリと批判されたときの表情がそこにあった。
「な、ならば触ってみるがよい」
「え」
困惑していると、とどめが。
「さっさと触らないと、今すぐお前をアリス海に沈めるか、カプセルに詰めてアステロイドベルトへ放り出してやる」
言うことをきかないわけがない。
誰しも命は大切だ。
ゆっくりと耳に手を伸ばす。
「やさしく触れ」
その言葉に生唾を飲み込んでしまった。理由はよくわかならい。
手を伸ばす先には、ピンととがったアッシュブロンドの毛並みの猫の耳。
そっと触れると、人工物にない暖かさがあった。

いや、わざとそういう機能がついているのかもしれない。つい力を入れて引っ張ってみると「ひゃん」という短い悲鳴が聞こえて慌てて手を離した。
「優しくしろと言ったではないか！」
猫耳を有する少女の目には、すこし涙が浮かんでいた。
「ご、ごめん」
「まったく。・・・・・・これでわかっただろうこれが偽者ではないと」
「う。うん」
こんなことがあるのだろうか。
人にネコミミがついているなんて。飾り物ではない本物の耳。
いやはや、世界は広い。さすが火星だ。
せまっ苦しい居住区では起こり得ないことがある。
「さてと」
テーブルのうえから、可愛らしいハンティングキャップを取り出して、耳が隠れてなおかつ自分が納得する位置を見つけるまで数回かぶりなおすと、セフィーネはベットから起き上がった。
銀次郎の背と比べれば、胸辺りにしかない小さな体だった。
「お前の処遇を決めないといけない」
その言葉に心臓の鼓動が激しくなり、槍でつかれたような鋭い痛みが体を駆け抜けた。　そうだ。この少女はいくら猫耳がついた小さな子供でも、自分を誘拐した犯人の一味なのだから。
「あ、あの。アウラーさん。ぼ、僕はいっ――」
一体どうなるんですか、という言葉は出てこなかった。それを妨げたのは苦虫をかみつぶしたかのような不機嫌この上ない顔をしたセフィーネがいたからだ。
「ふん」
セフィーネはそっぽを向いた。
何がいけなかったのかを考慮して、もう一度。
「セフィーネさん」

ほんのわずかだが、帽子の中で耳がピクリと動いた。
「セフィーネ」
これは逆効果。
「セフィ」
と、言ったときの彼女の不満顔といったら夢に出そうなほど恐ろしかった。その表情を向けられただけで悪魔も泣き付きそうな、そんな形相だった。
記憶にあるもので近いのは、義妹の一番嫌いな言葉をつい零してしまったときに状況が似ていた。
彼女は「セフィ」と呼ばれることが心底嫌なのかもしれない。
「じ、じゃあ、フィーネ・・・・・さん」
フィーネと呼んだときの彼女の表情の変わり様は面白かった。帽子の中で両方の耳が忙しなく動いてそして、振り帰って見せた表情は、とても可愛い笑顔をしていた。しかしそれも一瞬で、さん付けで呼んでしまったため、すぐその太陽のような笑顔は隠れてしまった。またそっぽを向いたからだ。
まるで山の表情だ。と思った。
これ以外に合う語彙はそうないだろう。
胸中で二度三度頷いた自分がいた。
「ギリギリ合格点ね」
「は、はぁ」
「・・・・・・。ふと思ったんだけど、お前わたしのこと知ってるわよね？」
「え？」
時が止まった。
誘拐犯が自分のことを知っているか、と聞くものなのか。
いや、古今東西自分で正体を暴露するは犯罪者は小説の中の怪盗くらいなものだ。
いくら頭を巡らしてもフィーネの事などは、一味の一人という情報以外は知るはずも無い。

分らないという意味で、首を傾げると小さな手が急にシャツの襟首をギュッと掴んできた。
「お―ま―え―。わ。わたしの、こ、ことを、し、しら、知らないですって！！」
「うわっ」
フィーネに牙が生えていればそのまま食い殺されると、本気で危機感を感じずにはいられない。
セフィーネにバランスを崩されそのまま勢いでベッドに押し倒されてしまった。
銀次郎に馬乗りに近い形で、セフィーネがへその辺りに乗っていた。
この体勢はマズイ。
大変よろしくない。
しかし、彼女は気にしてもいないようで、その体勢のまま銀次郎の肩を押し付けるように力を加えてきた。
よほど彼女のことを知らなかったことがいけなかったのだろうか。
だとしたら、これほどまで理不尽なことは無い。
「わたしは・・・・・・わたしは」
これは貞操の危機というやつなのか。
桃色の髪から、とても甘い匂いが鼻孔を刺激していくなか、そう思った。
春香。兄ちゃんはどうなるんだろうか。
――コンコンッ。
突然、板を叩くような音が聞こえ、セフィーネはそのままの状態で、音がした方向へ首だけ動かした。
「お楽しみのところ申し訳ありません」
若い男の声が後ろ、ドア付近から聞こえた。
興を醒まされた子供のようにセフィーネはムッとする。
「実はちょっとした問題がおきまして」
その一言を聞いた後のセフィーネの表情の変わりようは凄かった。

怒ったり、ムッとしたりしていた顔がスッと見目麗しい美貌をもつ少女のそれに戻ったからだ。
セフィーネはまるで山の表情みたいだと思ったが、改めなければならない。山は山でも人を寄せ付けない難所の山の表情をもつ少女だ。
「何があったの？」
何事も無かったように銀次郎を跨いでベットから降りていった。ベット脇のテーブルにおかれた帽子をかぶって。
自由になった体でその後を追っていくとドア付近に、白いスーツと短めの金髪に黒縁のメガネをかけた二十代後半ぐらいの中肉中背の東欧系の男が立っていた。
男は皮の手提げカバンから数枚の紙束をセフィーネに手渡すと、それを渡された彼女は片手にそれを持ち、もう片方で頭を掻きうなっていた。
「うーん。うーん。うーん」
考え事をしているときに、爪を噛むのは彼女の癖だろう。
「このデータ、計算間違ってるんじゃないの？こんな数字でてくるわけないでしょ」
「いえ。それはこちらで数回チェックしたものなので間違ってはいません」
「まったくこんな金食い虫なら凍結してしまえばいいでしょうに」
「しかし、この設備は先々代のアリスから計画されていたことですし、それにもし万が一のことがあったときの手札として有効に使えます。また、凍結されるのでしたら既に手元にある資財を全て月に返すことになりますので、その交渉をお願いすることになり、手を煩わさせてしまいますが・・・・・・」
「はいはいはい。わかりました。承認するわよ」
「はい。確かに。ところで、後ろの少年はどうするおつもりですか」
「ああ。そいつのことね。まがりなりにもわたしの秘密を見てしまった以上は、開放するつもりはないわ」

「姫様の秘密ですか。それは、気になりますね。是非、私にも教えていただけませんか」「やめておきなさい。もし知ったら、あなたをアリス海に沈めるか、アステロイドベルトへ放り出すことになるわよ」
「ははは。それは困りますね」
二人の目線は銀次郎に向けられた。会話こそ穏やかであるが、そこには黒い空気が立ち込めていた。貞操の危機こそ去ったものの、今度は生命の危機が訪れた瞬間だった。
体中の血液という血液が凍りつき、呼吸が止まる。
セフィーネはサクッと、男のバックから白紙の紙とペンを奪い取ると、何かを書き始めた。書き終ると、それをもってベットの上で半身を起こしたまま固まる銀次郎の側へ歩み寄ってきた。
首だけ何とか動かし、セフィーネの顔を直視した。
白磁のうえに薄い紅色を乗せた真っ白い肌の整った顔に、蒼穹をそのまま閉じ込めたような大きくて青い瞳が怪しく輝いていた。
「お前。わたしのものになりさない」
少年の目の前に突き出された紙にはこう記してあった。

【本日。この時をもってアリス州知事セフィーネ・リリー・ココフ・アウラーの私設秘書として職務に就く事を命ずる。尚、アリス州知事命令に異を唱える権利は認められない】
「なっ」
その時の自分の顔を切り取ってキャンバスに貼り付ければ、世界中の美術展を総なめにすること間違い無かっただろう。
タイトルは、青天の霹靂。
「拒否権は無いわ」
「き、君は一体・・・・・・」
「わたしはアリスのセフィーネ。このアリス州を統括する知事よ」
頭を鈍器でぶん殴られたような衝撃が、動揺しかけた意識を逆にはっきりさせていく。

「ち、知事！？」
「そう。世界を分解してその欠片を再構築する。わたしにはその権限を持つ者」
ぽかんと、口を開けて呆気に取られていると、セフィーネは自らを「独裁者」
と呼んで締めくくった。
おそらく、それは本日――いや、人生の中でも忘れることが出来ない不幸が銀次郎に舞い降りた瞬間だった

# 第二章―猫耳とうさ耳

――――モノローグ――――

新月が、黒い世界を作っていた。
豪奢な屋敷の外に一台の車が止まった。
中からはタキシード姿の男と、純白のドレスで身を包んだ婦人が降りてきた。
二人は今夜ここで開かれるパーティに出席するために来た。
普段なら執事が真っ先に出迎えに出てくるはずが一向に誰も出てこない。
痺れを切らした男は、妻を車に待たせて屋敷へと向かう。
大理石の階段を数段登り、大きくて立派なドアを開け放ち、大声で自分が来たことを告げるが、賑やかなはずの屋敷は静まり返っていて男の声は虚しく響くだけだった。
日時を間違えたのか。
そう男は思い、招待状の時間と金にダイアモンドを散りばめた腕時計の時間を確かめるが、間違いは無かった。もし変更があれば予め連絡が来るはずだ。
――ガシャン。
屋敷の奥で何かが割れる音が聞こえた。
が、また屋敷は静寂に包まれた。
男は言い知れぬ不安に支配されようとしていた。しかし、何が起こっているのか確かめたいという欲望に負け、一歩、また一歩中へ入っていく。
中は真っ暗だった。
ポケットからライターを取り出し、慎重に音をなるべく立てないように進んでいく。
屋敷の中央まできたとき、通路の奥の角から明りが見えた。

そこは庭へ突き出るような形の部屋。高い天井に、ガラスをふんだんに使った開放感のあるパーティーホールだった。
近づくにつれて緩やかな音楽も聞こえてきて、男はほっと胸を撫で下ろした。
「なんだ。いるんじゃないか。びっくりさせやがって」
角を曲がり、ホールの扉の前まで来ると、ご馳走の数々から漂ってきた香りが食欲を誘う。
ただ、何か。
何か違和感があった。そう、人の声がしない。いや、そうだあいつらはイタズラ好きだからきっと俺を驚かそうとしているんだろう。きっとそうだ。よしよしここは乗ってやるか。
男はそう思い、向日葵の装飾が施された金のドアノブを握って、開け放った。
たが、そこには誰も居なかった。
ピアノの自動演奏、まだ湯気を放つ出来立ての暖かな料理。
しかし、そこに主役たる人の姿は微塵も無い。
一体どういうことか。
また再び不安がこみ上げてくる。
――ギシ。
何かが軋む音が天井から聞こえ床にぽたり、ぽたりと、液体が落ちて滴を跳ねた。
男は顔をゆっくり上に傾ける。
そこにあったのは・・・・・・。
水晶のシャンデリアに、首から吊るされた操り人形のように息絶えた家人や招待客たちだった。
呆然と立ちすくみ宙に漂う屍を見ていた男は、背筋に刺す様な寒気を感じゆっくりと後ろを振り返った。
「　　」
そこには、まだ三～四歳ほどの少女がジッと男を見つめていた。
あちこちから綿が飛び出し、黒く変色したボロボロのテディベア

を抱きしめるように持つ少女は、服もボロを着ていた。
「き、きみは・・・・・・」
恐怖のあまり体は今にも倒れそうなのに、意識はハッキリとしていた。
少女は何も答えない。
ただ、右手を上げ、人差し指で男の後ろを指差した。
「え」
その一言を発した後、男の体は宙を浮いていく。
屍と同じようにシャンデリアに吊り下げられた男の首にはワイヤーがいつの間にか巻かれ、もがき苦しむ男は、自分の横で事切れている妻を見てさらに暴れた。しかし、抵抗も虚しく。
男は、自分の首が折れる音を聞き、そのまま絶命した。
開けたままの目には、少女の側に立つ仮面を付けた男の姿が映っていた。
ふわりと風が吹いた。
すると、どこからか紫色の花びらが舞った。
刹那。
男と少女の姿は消え、シャンデリアが屍の重さで軋む音と、ピアノの音が屋敷に響いていた。

## 第二章

アリス州中心部から少し離れた郊外。
そこには、プルーム学園の男子寮がある。
親元を離れて登校する生徒のために用意された寮は、石造りの立派な建物で生徒一人に個室が与えられるなど待遇はさすが有名学園

の寮といったところだ。
ただ不思議なのは女子寮は、学園の敷地内にあるのに男子寮は離れたところにあることだ。　――それはまた別の機会に
その一室で今明りが灯った。

「はぁ―。なんだか色々あって疲れた」
あの少女―セフィーネに開放された後、彼女の補佐官をしているトムという男に寮まで送ってもらった銀次郎は、帰ってくるなりベットへ半ば放心状態で倒れこんだ。
手には、セフィーネが走り書きした即席の任命状。後日正式な任命状が送られて来るそうだ。
朦朧とした意識の中、だだそれだけ――その一文だけはハッキリと意識の中にこれでもかと存在を誇示していた。
『秘密を喋ったり、職務を拒否したり、命令に逆らったら全権限を持ってお前を滅ぼす』　もちろん、紙にもハッキリと黒マジックで書かれている。
去り際に、セフィーネが上書きしていった。
（・・・・・・あの子がこのアリス州の知事かぁ）
まだ小さいのに知事という仕事をしているなんて大変だなぁ・・・・・・あ。壮絶にまずい事を思い出した。
身を起こし、無造作にベットに投げ出されたバックを足で引き寄せる。
出てきたのは学園の入学届。
期限は今日の夕刻までだったが、セフィーネのせいで提出することができず、資格を失効してしまったのだ。
期待に胸躍らせてやってきたのに、その望みは潰えてしまった。
在留ビザは就学ビザをもらったから早々に強制送還されることはない、寮に入るときのセキュリティも配布されたカードも何事もなく通ったから雨風と食事も心配ないし、登録は生きている。ということは、まだ機会が残っているのでは。

明日朝一で学園の事務室に行って理由を話せば――
いつの間にか気絶するように銀次郎は夢へと落ちた。

翌朝。
けたたましい電話のベルが部屋に響く。
電話の主はかなりしつこいらしい。
根負けし、仕方なく電話を取ると、トムからだった。
「朝早くすみません。実は知事が君を連れてくるようにと言われまして」
時計を見ると朝6時過ぎ。
「あの、ちょっと予定があるので」
「えっと知事から伝言です。逆らったら即宇宙へポイだそうです。知事は冗談をあまり言わない方なので恐らく本気かと」
朝のため息ほど憂鬱なものはない。

霧に沈む街は、朝日の暖かな光を浴びることで、光りと闇のコントラストによる一瞬の美を生み出していた。
銀次郎を乗せた車は通勤ラッシュ帯にそろそろなりかけようとしている大通りを走っていた。会社員たちを乗せた路面電車が併走している。皆眠そうな顔をしていた。
三月。
春といっても朝晩は冷え込む。シャトルの荷物制限のせいであまり服を持って来れなかった銀次郎にとってまだ辛い時期だ。
スーツなど持っていない学生がそんな畏まった所へ行くときには、やはり学生服がいいだろうと大急ぎで身支度を整え、迎えに来たトムの車に乗り込んで、知事が待つ州庁へ向かっていた。
助手席に座った銀次郎は、ずっと外を眺めていた。
別にふてくされているわけではない――少なからず早朝に叩き起

こされたことは関係しているが。
殆ど初対面である人と打ち解けてベラベラ喋れるほど、人間ができていない銀次郎にはどうこの男と会話を交わせばいいのか、その切っ掛けが掴めずこうしているのだ。
（うう。気まずい）
トムはただ無言で車を走らせている。
車内には、電気自動車のモーターが駆動するちょっと高めの音と、車載端末からのテレビのニュースキャスターの声しかない。

『先日、ルナ・ツーで起きました爆弾テロの続報です。ルーベングループ会長フォルクマール氏を狙ったテロによる被害者は、フォルクマール氏とルーベンスグループ関係者の方と付近を通行されていた一般の方を合わせて五十人から二十人増えて七十人に上り、今年で最も悲惨な事件となってしまいました。テロ首謀者は月のスラム街出身者が集まり、待遇改善を目的に近年活動を活発化している『月上の革命家』と呼ばれるグル――』

「またテロですか・・・・・・」
「最近、ルナ・ツーのスラムへの援助が極端に減ってるらしいからね」
つい出てしまった独り言に、トムがそう返してきた。
「タバコ吸ってもいいかな？」
「あ、はい」
トムは運転席側の窓を半分明け、タバコに火をつけた。
朝の冷たい風が車内に吹き込み、寒さでまだ眠気が残っていた頭が叩き起こされる。
「ごめんね」
「いえ」
「姫様の側だと全然吸うことができなくてねぇ」
「そ、そうなんですか」

「おまけにアリス州だと路上も吸えなくて、唯一吸えるのが車の中だけ。禁煙も考えたんだけど昔から止めれなくて」
「・・・・・・あ、あのトムさんは、あの子の補佐官になってどれくらいなんですか」
ぷかり、ぷかりと口から出た煙が、外へ流れていく。
「そうだなぁ。もう半年位かな。どうして？」
「え、えっと。せ、セフィーネから私設秘書として働けと言われたんですけど、何をすればいいんでしょうか。あ、あと本当に僕なんかが務まるんでしょうか」
「そうだなぁ仕事は、スケジュールの調整、姫の身の回りのお世話、あと姫が仕事をサボらないように見張ったりとかかな。ううーん、姫が決めたことだからなぁ。でも資質はあると思うよ」
資質があると言われれば、嫌な気持ちはしてこない。
銀次郎の胸中は、豚もおだてりゃ木に登る状態だった。
タバコを灰皿に捨てた後、トムは「ただし」と付け加えた。
「ただし、姫様は冗談が通じないから発言には気をつけたほうがいいよ。去年の冬だったかな。寒がりの姫が、知事室の暖房をガンガンにかけていたところに他の街の市長が仕事で姫を訪問してね『こんなに暑いなら大極点の観測所に行きたいですね』と冗談で言ったのを聞いて本当にその人を飛ばしちゃったことがあったからねぇ」
「え」
「あれは傑作だったね」
トムはそう語ると実に楽しそうな笑顔を浮かべた。生真面そうな顔つきに似合わない子供っぽい笑顔だった。
（変な冗談は言わないようにしておこう）
そう心に誓った銀次郎であった。

アリス州庁。

初代アリスのときに建築された州庁は、地球や月のように民衆の代表者を選ぶ間接民主制ではなく直接民主制を採択している州にとっては重要な役割を占める中枢である。
しかし、そう言われなければ役所とは気付くことができない、立派な石造りの豪奢な建物だった。
空中から見るとロの字形の建物がいくつもまるで迷路のように繋がっている。
建物の中央には真っ白のテラス付きの中庭があり、知事室はその中庭が見渡せる位置にある。
「はぁ―」
マホガニー材の立派なドアの前で、銀次郎は深いため息をついた。
そこまで一緒だったトムは別な仕事があるということで、もうここにはいない。そのためどう中に入ればいいのやらと悩んでいた。
プルーム学園の制服姿の少年が知事室の前でウロウロしている姿を、職員が興味津々で注視していく。
「早く入ったらどうなの」
ドアの奥から響く少女の声。
その端には僅かに苛立ちが混じっていた。
「は、はい。失礼します！」
ビクリと体が飛び上がり、騎兵隊の行進のように中へはいる。
室内は中庭からの陽射しが眩しく、開け放たれた窓から庭に咲き乱れる花々の香りで満ちていた。
その奥。
チーク材の縦幅三メートル以上はある異常に大きな机と、備え付けられた皮の大きな椅子に人形が座っていた。
十一から十二歳くらいの等身大の大きさ。丈の長い赤いチェックのワンピースに身を包み、季節にはまだ早い麦藁帽子をかぶり、それから零れる長くて美しい桃色の髪が背後の大きな窓からの陽射しを踊るように弾いていた。
白磁に薄紅色を刷いたような肌が美しく、蒼穹をそのままガラス

玉に閉じ込めたような蒼い瞳が、訪問者に一度視線を送りまた書類へと戻っていった。
「・・・・・・・・・」
エレベータの中なかにいるようなそんな気まずさが部屋にあった。
適うことならこのまま全力で逃げ出したいそんな雰囲気。
「銀君」
美貌を持つ少女は、引き出しから大きな封筒を取り出すと机のうえに置き、人差し指で手招きをする。
「は、はい」
側に寄って封筒を取る。
椅子が大きいせいかより小さく見えるセフィーネは、昨日のような姿を知らなければ皆、深窓のお嬢様と思うだろう。
この子が、アリスの帽子姫と呼ばれる少女なのだ。
州民は公式の場でも、室内に居ようとも常に帽子をかぶっているセフィーネを見てそう愛称をつけたが、実際のところ何故帽子をかぶっているのか、という理由に関してはアリス州の謎として多くの噂が語られている。
偶然にもその理由を知ってしまった銀次郎は、紆余曲折あって知事の私設秘書として働かされることになった。
命を奪わぬ代わりに。
自らを『独裁者』と呼ぶセフィーネ。
――独裁者。それは大昔の地球で国の基礎である国民を無視して独裁政治を敷き多くの罪の無い人々を殺した大悪人たちだ。
なぜ、少女は自らそう呼ぶのか。
僕は不思議でならない。
「中を開けて確かめるように」
そう告げるとまた書類に目線を落とす。
恐る恐る中を開けると、今ではあまり目にはかかれない羊皮紙には桜の花びらの印が押してあり昨日セフィーネに渡された任命状と同じものが書かれてあった。勿論、原文そのままで。

次に取り出したのは、契約書らしき書類。職務規定から始まり、給与の詳細、誓約書を兼ねる書名欄。
給与は学生がアルバイトで稼げるような金額ではない。家の家計状況を知っているため火星に着いたら即アルバイトを探さないと日々の生活費に苦労することになる銀次郎には嬉しい金額だった。
生活費を引いても、家族に仕送りしても、お小遣いを引いてもまだ十分残る。立派な仕事としての給与額だ。
世の中お金がないと生きていけない。
無理矢理こういうことになったが、これなら俄然やる気が起きてくる。
（・・・・・・意外と単純なんだな僕って。いや、しかしこれで家族に少し楽をさせれるぞ。頑張るぞ！）
「そこの下に署名を」
と、セフィーネは万年筆を机の上においた。
――いや、給与が十分すぎるから僕がこうして署名をしているのではない。何かがもう一つ僕の手を動かしている・・・・・・そうだ。セフィーネの言葉が気になるからだ。彼女の側で働けば、その理由が分るかもしれないからだ。
・・・・・・そう考えても僕は単純だなぁ。
チラリと、セフィーネの顔を見ると、それに気付いたのか「逆らうことは許さん」という容赦の無いメッセージが込められた目線が返ってくる。
署名を終えた紙をよこせと、手で合図してくるのでセフィーネに手渡しすると、丁寧に折られた紙を取り出し、それを銀次郎に手渡す。中を開けと目で催促してくるので黙ってそれを開き、
「　　」
そこに書かれていたのは、プルーム学園からの書類で入学許可証だった。
でもなぜ。
なぜ、セフィーネが。

打たれたように呆然とした。
「昨日の借りは返したから」
「え」
「昨日の借りは返したからって言ったの！」
大人とも子供ともつかない冷ややかな表情が一変、歳相応の少女がムッとしたときの表情となった。
「じゃあ、学園に？」
「わたしの秘書たる人間が、学がなかったら恥ずかしいでしょ」
と言ってそっぽを向いた。
おそらくセフィーネは、学園側に連絡を取ってなんとか手続きを完了させてくれたのだろう。
「ありがとう」
「べ、別に礼を言われることは、してないわ。わたしのせいで、銀君が学園に入る機会を潰してしまっては、知事失格だからよ」
少し顔を赤らめたセフィーネは椅子をくるりと回して銀次郎に背を向けた。
美貌の持ち主で横柄な女の子という認識は改めないといけない。
「・・・・・・ところで銀君」
「何？」
「今日のわたしの予定は？」
「え」
唐突な言葉に、戸惑う。
そして、トムと別れたときに手帳を渡されたことを思い出し、制服のポケットからそれを取り出す。そこには今月中の予定が書き込んであった。トムが気を利かせて書き込んでくれたようだ。
今日の予定欄を見るとそこは真っ白だった。
「そう。今日は真っ白。何も無い。退屈で死にそう。なんとかして」
「えぇえ！そ、そういわれても」
ふと目線が、セフィーネの机右端に山積みされている書類の山に目が留まる。

「その書類は？」
くるりと椅子ごと向き直ったセフィーネは、実に不機嫌そうに書類の山を睨んだ。
「銀君。書類なんてものはただの儀式みたいなものよ。わたしの所に書類が来る前にもう事は終わってしまっているの。だから、わたしが書類をさばくのが遅くても何も支障はきたさないわ」
「そんなものかなぁ」
「そんなものよ」
今までアルバイト経験はたくさんあるが、この仕事はあまりに異質だ。
飄々と語るセフィーネに、なんだかうまく丸め込まれた感がするが。
「ふわぁ～」
日差しが強くなるにつれて、部屋に満ちる陽気も強くなる。
大あくびをするセフィーネを見ていると、こっちまで眠たくなってくる。
「ひま～」
全く仕事をする気がないのか、セフィーネはあごを机の上に乗せて脱力していた。
「いや。でもさ、仕事があるんだから」
「却下」
「で、でも」
「却下」
「う」
「あ。喉が渇いたからお茶。特急で。早くしないと大極点の観測所へ飛ばすわよ」
「げぇ。そ、それは困る」
トムの言葉が鮮明に蘇ってきて、銀次郎はしぶしぶ隣の給湯室へ消えていった。
お湯を沸かす準備を始めると「お茶は少しぬるめにしてね！」と

注文が飛んできた。
注文どおりにぬるめのお茶を淹れ、知事室に戻ってくるとそこには誰も居なかった。
「あれ！？セフィーネ！？」
部屋から出たならドアが開く音がするから気付くはずだ。
「人にお茶を淹れさせておいて、どこにいったんだよ」
中庭で日向ぼっこでもしてるのかと、窓に近づいて隅々まで覗いてみても鳩が数羽居ただけだった。
（・・・・・・おかしいなぁ。部屋にいるはずなんだけど）
うーんと唸りながら首を傾げる。
――ゴトン。
「ゴトン？」
その音は確かに銀次郎の側――机付近から聞こえてきた。
音を確かめるため机に耳を近づける。すると、ゴソゴソと何かが蠢くような音がかすかに聞こえてきて、銀次郎は怪訝そうに首を傾げた。
再びゴトン、という音が聞こえてきて銀次郎は椅子を引き、机の下を覗き込む。
そこには、地下室があった。大柄な大人でも楽に隠れられる広さがあり、それを隠すように大きなテディベアのぬいぐるみが阻んでいた。
しかし、隙間から奥を覗くとセフィーネがシングルベットサイズのクッションの上で猫のように丸くなり眠っていた。
「なるほど、こんな大きい机にはそんな秘密があったのか」
小型の端末に電話、冷蔵庫、本棚、ランプに、机の下にまた小さな机まであってよくぞこんな空間に押し込んだものだと感心してしまう。
机の天板をノックするように数回叩く。
「もしもし。お茶が入ったんだけど」
秘密の隠れ家で眠っていた人形がもぞもぞと起きだし、眠たそう

に目を擦り、
「レディの部屋をのぞくなんて」と不満をもらした。
「お茶はどうするんだい？」」
「ここに置いておいて後で飲むから」
セフィーネがその小さな手で指示した場所は、地下室の机の上。
銀次郎は、そこまで降りるの？と眉をひそめた。
紅茶を零さないようにタンブラーに入れ替えて、銀次郎は四つん這いになり机の下を進んでいく。そこから緩やかなスロープが続いている。初めは窮屈だったが降りるにつれてあまり苦もなくたどり着くことができた。
「はい。お茶」
「ん」
分厚い本に顔をうずめているセフィーネから生返事が返ってくる。
「しかし、広い空間だね～」
「この秘密のサボリ部屋は、昔の知事のときからあったみたいね。知事になると先代の知事からここの場所を教えてもらうの。誰も知らない秘密の部屋。ここに入ったのは銀君がはじめてよ」
「え。そうなの？・・・・・・ってそんな秘密を僕に喋ってもいいの？」
「うん。だって銀君は契約書に署名したでしょ？あれには守秘義務を遵守するという誓約書も兼ねてるから、わかるでしょ？」
「つまり、ここのことも耳のこともきみが秘密というものは喋ったりすると――」
「宇宙へポイ」
そうだった。僕はこの可愛らしい微笑を向けてくる少女に命を握られていることを忘れていた。
「わかった、喋らないよ」
「よろしい」
その屈託のない天使のような笑顔を向けられて、銀次郎は耳まで顔を赤らめた。

「くす。じゃあ、もう一つ秘密を守ってもおうかな」
「・・・・・・はい？」
セフィーネは一通の手紙を右手にチラつかせていた。
天使の笑顔から一転、小悪魔な微笑むを向けるセフィーネを見て、銀次郎はそこはかとない不安を覚えた。

二人は州庁を抜け出して路面電車に乗っていた。
平日の昼過ぎということで車内は込み合ってい、当然席に座ることが出来ず邪魔にならないように後ろ側に発つことにした。
セフィーネの体は本当に小さく、銀次郎のへそと胸の中心くらいに頭がある。
知事である少女と、こうして並んで立つと兄妹にも見えなくは無い。そう思うと、わずかばかり苦笑してしまう。
車内は停留場をいくつも過ぎた辺りで、少しずつ乗客が多くなりあっという間に車内はぎゅうぎゅう詰めになった。その状態で、左右に揺れる路面電車に立っていることは容易ではない。特に小さいセフィーネならなお更だ。
次第に疲れてきたのか、セフィーネの足元が、振動に合わせておぼつかなくなる。吊り革に掴まれば幾分かましになるが、この小さな体で吊革に掴まると逆に危なくなる。
銀次郎は他の乗客に迷惑がかかる前に、セフィーネに手を差し出した。
「セフィーネ、手をつないでおこう」
「・・・・・・銀君、君はそういう趣味があったのね」
「って違うよ！」
つい大声を出してしまったため周囲の乗客からの目線を感じ、銀次郎は恥ずかしくなって下を向いた。
「くすくす」

麦藁帽子の下から、忍び笑いが聞こえてきてますます恥ずかしくなった。
「・・・・・・もう。車内が混雑しててきみが危ないから手をつなごうって言ったのに」「ふふ」
セフィーネが手を差し出してきて、二人は手をつないだ。とても柔らかくて小さな手だった。
ふと昔義妹と映画を見に行った時のことが蘇ってきて、くすっと笑みがこぼれた。
「何がおかしいの？」
帽子で表情は見えないが、きっとムッとしているんだろう。
「あ、いやなんでもないよ。・・・・・・で、そろそろ目的を話してくれてもいいと思うんだけど」
「そうね。預けてあるポーチからさっきの手紙を出して」
銀次郎は、肩から掛けている白いポーチの中から、知事室の地下室で見せてもらった手紙を取り出してセフィーネに手渡した。
セフィーネは手紙を受け取ると中から紙切れを一枚取り出して、それを銀次郎に手渡した。
「それは招待状よ」
「招待状？」
その紙切れにはセフィーネ宛で、＜ギャラクシー・プリンセス号就航記念パーティ招待状＞と金の飾り文字で書いてあった。
「ギャラクシー・プリンセスという船名は聞いたことが無いなぁ」
「この船は月のルナ・スリーでつい先週就役したばかりの豪華客船だから、銀君が知らないのも無理ないわね」
「へぇ～」
一般庶民の僕にはあまり縁のない話だ。とは率直な感想だ。
「この船はね。今、ブラウン港に入港していて、わたしに招待状が来てたの。でも、どこにいったのか分らなくなってて、でも昨日銀君がわたしの寝室を漁ってくれたお陰で見つかったの」
「あぁ、あの部屋ねぇ。・・・・・・セフィーネ、もう少し部屋は

片付けようようね」
あの部屋の散らかりようは思い出すだけでも深い深いため息が出る。
セフィーネは散らかしくせを指摘されたのに、たいして何も思っていないようで、銀次郎に体を寄せ、上目遣いで僕の顔をじっと見ていた。
今日の天気―抜けるようなどんな晴天の青でも、どんなサファイヤでもこの少女の瞳の蒼さには絶対に適わない。その瞳を見ていると、空に落ちてしまいそうなそんな感覚を感じてしまう。
蒼穹の瞳が輝いた。
「・・・・・・だって、銀君がいるでしょ？」
「はい？」
「わたしが片付けをしなくても、銀君がやってくれるからわたしがする必要はなくてよ。銀君が綺麗好きだから秘書として雇ったの。そうじゃなかったら、今頃宇宙よ」
（げげぇ！？）
銀次郎は唖然とした。
知事の秘書として雇った理由がそんなことだったなんて。いや、これはある意味命拾いをしたということだ。
ほっと胸を撫で下ろしているとしかし、これは秘書の仕事なのかとふと考えてしまう。「ね、ねえ。それって秘書の仕事なの？」
「む」
「やっぱり、片付けとかはちゃんとしないとダメな大人になると思うんだ」
セフィーネはそっぽを向いた。
（何か気に触ることでもいったかな・・・・・・・）
「・・・・・・銀君、紙とペンを出して」
「何で？」
「いいから早く。命令よ」
刺々しい声が下から聞こえてきて、銀次郎はいぶかしみながなら

メモ帳とペンをセフィーネに手渡すと、何かを書きなぐり始めた。
「これ」
「ん？なに？」
相変わらずそっぽを向いたままのセフィーネは、手だけを出してメモを返してきた。

「うんじゃ、よろしくね」
ガーンと、ショックを受けて呆然していた銀次郎は、電車の振動に負けてそのまま吹っ飛ばされそうだった。
『次は―ブラウン港。次は―ブラウン港』
「ほら、降りるわよ」
（ずるいぞぉぉぉ。権力を振りかざすなんてぇぇぇぇぇ！！）
とは、口が裂けても言えなかった。
しばらくすると電車が停留所に止まった。
フィーネは、銀次郎の手を引っ張って電車の前にある降り口に向かってトコトコと歩き出した。その手にはいつの間にか、銀次郎の財布が握られていた。
「・・・・・・・・・・・・・・はっ。そ、それ僕の財布！」
「何言ってるのよ部下のものは主人の物でしょ」
振り返ったセフィーネは、したり顔を浮かべていた。
「ちょ、ちょっと」
そういっている側から小銭を取り出して二人分の料金を払うと、スルリと手を離して一人で降りていった。
銀次郎は、ステップの上で立ち尽くしていると「降りないの？」と、運転手からせかされて渋々電車を降りた。
――電車を降りると、潮の香りが濃い蜂蜜のように銀次郎を包む。
ひしめき合う大小様々な宇宙船が、まるでビル群のように視界を埋め尽くしていた。その隙間から見えるのは青い海。アリス州でも一番大きい港だった。
何かの照り返しで、眩しくて手で光を遮ると指の隙間から、巨大

な宇宙船が空へと上がっていった。
「うっわ〜」
感嘆の声を上げていると、セフィーネが「田舎者」とトドメを刺しに矢を放った。
しょんぼりと、その場にしゃがみ込んでいじけた銀次郎の手を引っ張って港の商業区へと続く道へ歩き出す。
「さあ。いくわよ
「ちょ、ちょっといったいどこに」
「貸衣装屋よ」
「かしいしょ――？」

二人は商業区の一角にある貸衣装屋にいた。
客のニーズにギリギリまで応えるべく、ありとあらゆるジャンルの衣装を取り揃えているのがモットーのこの店の店内は、端末で気に入った衣装を選ぶと自動的に衣装が出てくるようになっていて、ウィンドーに新入荷の衣装や人気の衣装が飾られているいるだけで店内には、十数台の端末と試着室と会計と衣装の受け取り用のカウンターしかなくシンプルな店だった。
銀次郎は端末には触らず、セフィーネが何やら熱心に端末を操作しているのをただぼーっと見ているだけだった。
――数分間。
「今日のパーティは仮装パーティなのよ」
「あぁ、なるほど」
「仮装パーティって、聞いた感じだと趣向を凝らしてお遊び的な要素が強いけど、招待客によっては重要な場となるのよ」
全く理解できないと首をかしげた。
「いい。この招待状にはメンバーリストまで付いているのよ」
そう言ってセフィーネは、銀次郎から招待状が入った封筒を預か

ると中から数枚の紙を取り出して広げて見せた。
人名が紙の上から下へと続いていた。
「ごめん、まったくわからない」
するとセフィーネは、少し呆れたように眉をひそめ、
「ええ。こ、このロイド・ゴードンって人知らないの？」
「うん。誰？」
まるで雷にでも打たれたように驚いて、深刻な面持ちでセフィーネは銀次郎の顔をのぞき込んできた。その目には、哀れみも混じっていたのは多分気のせいだろう。
「・・・・・・・・・はぁ。この、ロイド・ゴードンって言う人はね。今日のパーティの主催者で、ギャラクシー・プリンセス号の所有者で、ゴードングループの会長でもある人なの」
「へぇ～」
「へぇ～じゃないわよ。ゴードングループって言ったら月面都市の実質的な支配者と言われているくらいに影響力がある経済界の重鎮なのよ」
「そんなすごい人が来るんだ」
「そうよ。ということは、これは何を意味しているのかしら」
ポカンと宙に視線を泳がす銀次郎より数歩を歩き、振り返ったセフィーネは人差し指を少年に向けた。
これは試されている。
よし。
ゴクリと、唾を飲み込んで頭を回転させて導いた言葉を紡ぐ。
「お金持ちが一杯来る！」
セフィーネはしかめっ面をして、銀次郎を放っておきそのままとことこ歩いていった。　―回想終わり。
（お金持ちがいっぱい来るって言っただけなのに何もあんなガッカリしなくても）
銀次郎が微妙に傷ついていると背後から気配がした。
「うわっ。うぷ」

振り向こうとした瞬間、ビニールに入った衣装が顔を直撃した。
「なにぼさーっとしてるのよ。せっかくわたしが衣装を選んであげたのに気付きもしないなんて。何回呼んだとおもってるのよ」
血管が透けて見えそうなほど透き通る白々とした頬が、風船のようにぷーっとふくれっ面のセフィーネが腕を抱えて立っていた。
「ご、ごめん」
「まったくもう。それが銀君の衣装だからそこの試着室で着替えて、その制服はカウンターに預けておきなさいよ」
ソファに転がった衣装を拾い上げると中身は上下タキシードと、
「あっ。衣装は絶対それを着なさい。文句言ったら許さないんだから」
一度試着室に歩いていたセフィーネが戻ってきて、そう付け足すと何だか嬉しそうに試着室に入っていった。
ふわふわのウサギ耳がついたカチューシャが入っていた。
大昔の独裁者は、権力を振りかざして横暴を振るっていたらしい。
銀次郎は覚悟を決めるしかなかった。
―タキシードに身を包み、頭に、頭にウサギ耳のカチューシャをつけた銀次郎が試着室から出てくると、殆ど同時にセフィーネも出てきた。
出てくるなりセフィーネは、銀次郎の姿を見て吹きだし腹を抱えて笑い出した。
「くくく、な、なに、そ、その格好。あはは」
「似合ってるかなあ」
「くすくす。ううん、全然似合ってない。足の長さが少し足りわね」
人のコンプレックスに塩を塗り付けるセフィーネの発言に、憤慨した銀次郎はそっぽを向いた。しかし、視界の端に映るセフィーネの姿に、顔の向きを元に戻して、
「せ、セフィーネ、そ、その格好は」
「似合うでしょ」
「う、うん、とっても似合ってるよ。・・・・・・じゃなくて、頭

！」
銀次郎の目の前には、純白のレースをふんだんにあしらった丈が長いワンピースに身を包んだ等身大の人形が立っていた。首には鈴が付いたフリル付きの黒いチョーカーに、光った絹糸みたいな桃色の長くて美しいブロンドは黒いリボンで両側の髪を少しとめ、ツーサイドアップに変わっていた。
そして、視線をもっと上に向けると、銀次郎がセフィーネとこうして一緒に行動するきっかけとなった、少女の秘密が露になっていた。
少女の秘密――頭にピンと立っているアッシュブロンドの猫の耳。決して作り物ではない本物の耳。
「くす。こんな機会じゃないとこの耳を外に出すことはないから」
そう言ってセフィーネはいたずらっ子のような眩しい笑顔を銀次郎に向けた。
しかし、銀次郎は気が気ではなかった。
「は、早く帽子をかぶならないと」
「なんで？」
「なんでだって！？あ、ちょっと、せ、セフィーネ！？」
慌てふためく銀次郎を他所に、トコトコとセフィーネは試着室から店内へと消えていった。
（ぼ、ぼくが見たときはあんなに怒ったくせに！い、一体何を）
セフィーネの姿を店員が見つけた。
銀次郎は今にも意識が飛んでいきそうなほど、血の気の無い真っ青な顔をした。ぼくみたいな人間がまた増えてしまう。どうやって場を誤魔化したらいいのかと、思考がフル回転しだす。
しかし、店員はセフィーネに近づいていき、銀次郎は見ていられないと目をつぶる。
「まぁ。よくお似合いですわ。今日は何かありますの？」
「うん。今日はお兄ちゃんと仮装パーティに出席するの」
そんな会話が聞こえてきて、目をパチリと開いた銀次郎は、屈託

のない可愛らしい笑顔を店員に向けるセフィーネと、それを微笑ましく見つめる店員の姿が映った。
「あれ？」
店員が側を離れた後、セフィーネが銀次郎と手招きしてきた。
側に駆け寄ると、開口一番、
「ま、魔法でもかけたの！？」
と、セフィーネを問いただす。
「まさか。ここは貸衣装屋よ。よく考えなさい」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ、そうか」
合点がいったとばかりに、手をポンと叩く。
頭につけているウサギ耳のカチューシャがあるくらいだから、猫耳のカチューシャもあるはず。だから、店員は別になんとも思わなかったんだ。
冷静な態度で店員と対応できたからこその芸当だった。
「お兄ちゃん、そろそろ行かないと時間がきちゃう」
「ええ、そうなの！？」
「銀君」
セフィーネは、じゃれ付いてくる猫のように銀次郎の腕に抱きついてきた。
一瞬で、銀次郎の思考が警告を発した。
このセフィーネの行動は、経験上痛いほど見覚えがある。とっさに、腕からセフィーネを離すと身構える。
「ね、銀君」
セフィーネが上目遣いで、その輝く美しい蒼い瞳を潤ませてまた腕に抱きついてくる時点で勝率は十のマイナス１００乗しかない。狡猾とはまさにこのことだ。
降参と、両手を手を上げてカウンターへ料金を払いにいった銀次郎は、貸衣装の料金の高さに目を大きく見開いた。
これだと今月は、終わった。
うん、絶対。

心の中で血涙を流していた銀次郎の手を引っ張り、セフィーネは外へと歩き出す。
店を開けると、風が吹いて桃色の髪が揺れて、とても甘い香りが鼻を撫でていった。
――ギャラクシー・プリンセス号は、厳重な警備が敷かれる中停泊していた。
五百メートル級の細長い船体は、真っ白で傾き始めた太陽の陽射しを浴びてすこしオレンジ色になっていた。
次世代反応炉レーヴェ機関を三つ搭載した世界でも最新鋭の宇宙船。亜空間航法ヴァントフリーゲンクラス四を達成し、外宇宙を自由に行き来することが出来る。
二人は、特設のゲートで簡単なチェックを潜り抜けた後、浮き桟橋を渡り船内へ入る。　通路には他の招待客もいて、これから金持ちのパーティがあるという現実実がありありと感じられた。
しかし、船に近づくにつれて少しずつ胸中がざわめき始めていることに銀次郎は、気付きながらも、きっとそれは興奮しているからだと無視した。
浮き桟橋から沖の空を見ると、暗く重い雲が彼方に張り出していた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2817e/

---

高空のアリス―白と黒に生きる者

2010年10月26日04時48分発行